

『地下の水脈に向かって』 私の中のグアテマラ

(鍼灸師) 安藤栄里子

一昨年秋、駆け込んだ病院で耳慣れない病名を告げられた。医師は生存曲線を描いてみせ、「2年ってとこですな」という。ちょっと待て。それは私のこと？ 瞬間、「ゴー」という耳鳴りを覚え、カラダごと壁に塗り込められていくような感覚に襲われた。

さらに説明を続ける医師のペン先を追いながら、なぜか脳裏には次々と久しく遠のいていた人たちの顔が浮かんでくる。内戦で連れあいを奪われたグアテマラ女性たちの先頭に立ち、互いに助け合ったり、さらなる不当な弾圧を止めるよう軍や政府に訴え続けてきたロサリーナ・トゥユクさん、姉を暗殺した軍の責任を裁判で追及したヘレン・マックさん、15歳で受けた軍による凄惨な拷問の記憶を女性国際戦犯法廷で証言したヨランダ・アギラルさんら。いずれも危険に身をさらしながらもあしたの平和を願って闘うグアテマラの女性たちだ。

「運命」と「絶望」にすくい獲られてはいけない。呼吸を整え、根を張ろう。彼らのように根を張ろう。

それからの闘病生活は平坦でなかった。けれど、移植や東洋医療の恩恵を受け、何より仲間に支えられ、寛解を手に入れることができた。仕事にも復帰し、まもなく主治医の示した「余命」を更新する。

死と向き合うことは、孤独を知ることだと思う。ロサリーナさんたちはそんな孤独の床を割り、さらに深く根を張った。その下には人びとの「祈り」が地下水脈のように流れているのだろう。想像を絶する彼女たちの強さを思うとき、いまはそんな絵が浮かぶ。